



赤城山南麓の女堀

電

車の手動ドアをガラガラと開けてホームに立つと、快晴にもかかわらず、赤城山から吹き降ろす寒風が身にしみた。これぞ上州のからっ風だ。

群馬県伊勢崎市のＪＲ国定駅から北北西へ地図上直線距離にして約九〇〇メートルに「つつみ公園」がある。グランドゴルフ場として整備された南北に細長い公園で、「国定町二丁目」の交差点を西へ曲がり、最初の角を北へ曲がれば、すぐにたどり着く。

冬枯れた芝生の公園の北端まで歩くと、雲ひとつない青空の下、収穫を終えて高燥とした畑が広がるその向こうに赤城山がきれいに見えた。「裾野は長し赤城山」と謳われた、なだらかな山裾が広がっている。私がいる辺りは、ほとんど真っ平らだが、遠くからここを眺めれば、やはりあの稜線が続いているように見えるのだろう。

つつみ公園は、古代に造られた「女堀」という灌漑水路の終末点にあたる。遺構はほとんど残されていないが、前橋市上泉町付近の桃木川を取水点として、東南東へと進み、全長約一二キロ、幅一五メートル、深さ三メートルにわたって開削されていた。

開削時期は、天仁元年（一一〇八年）の浅間山大噴火以後、数十年のうちに推定されており、堀の終末点が当時の荘園の測名荘にあたることから、その

開発のために地領主の秀郷流藤原氏によって計画されたと考えられている。

しかし、未完成で通水はされなかったことが、調査によって明らかになっている。にもかかわらず、全線が開削されていたのは、細かく分けられた工区が一斉に着工されたことを示す。

取水点の標高は約九七・五メートル。終末点のつつみ公園は約九〇メートルで、その平均勾配はなんと約〇・〇六％しかない。つまり一〇〇メートルで六センチしか下がらない流路を設定しており、古代にそんな精密な測量技術があったか疑問だが、調査ではやはり測量ミスも見つかったらしく、水路ではなく溜池として計画されたとの見解もある。

女堀の名称からか、『明治以前日本土木史』は「鎌倉二位尼頼朝の妻政子一夜にして竣工せず、其儘にありし」という伝えを紹介しているが、群馬や埼玉の同名の廃溝があることから、役に立たない意味の「堀」が転訛したという説もある。

ただし、東京の多摩川を水源とした六郷用水では、文化十二年（一一八五年）の国学者・高田与清の『世田谷紀行』に、工事が捗らなかったところ、女を参加させたら男どもが発奮して上手くいったので女堀というたと記されており、この真偽はともかく、この頃

の六郷用水は現役で機能していたことから、女堀は必ずしも廃溝のみに与えられた名称ではないことがわかる。

そんなことを考えていると、からっ風がやんで暖かくなってきた。私が思い描く冬の上州らしからぬ、ぽかぽか陽気になってしまったが、歩くのには好都合だ。なにせ、ここは国定だ。赤城の山も、よく見える。そうなれば次は、あの人に会いにいかねばなるまい。



女堀の終末点 つつみ公園

〔交通〕JR両毛線 国定駅から徒歩約15分

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi